

出張先で一人きりになれる夜を、俺は嫌いではなかった。取引先との会食を終え、ホテルのエレベーターに乗り込んだのは午後十一時を少し回った頃だった。会社が手配した駅前のビジネスホテルは、特別豪華でもなければ不便でもない。こういう場所のほうが俺にはありがたい。誰にも気を遣わずに済む。

そして何より、自分の身体について余計なことを知られずに済む。俺は二十歳を過ぎてからずっと、宿泊先では大浴場を避けてきた。服を着て生活している限り、自分がカントボーイだと気づく人間はいない。わざわざ説明する必要もないし、知られたいとも思わなかった。

(部屋に入ってしまったら、あとは朝まで一人だ)

そう思っていた。チェックイン自体は何事もなく終わった。フロントで対応したのは年配の男性スタッフで、カードキーを受け取っている最中、隣のカウンターから明るい声が聞こえてきた。

「はい、大丈夫です。明日の朝でしたら六時半から朝食会場開いてますよ」

何気なく視線を向ける。

別の宿泊客を相手にしていたのは、俺より明らかに若い男だった。黒に近い髪。ホテルの制服をきちんと着ているのに、笑った顔だけ妙に人懐っこい。背も高い。胸元のプレートには「瀬尾泰海」とあった。

(若いな……)

思ったのは、それだけだった。俺はすぐに視線を戻し、そのままエレベーターへ向かった。部屋へ入ると、ジャケットを脱いで椅子の背へ掛ける。ノートパソコンを開き、明日の予定だけ確認してからシャワーを浴びるつもりだった。ところが十分ほどして、廊下へ飲み物を買いに出ようとしたところで異変に気づいた。ドアを閉め、念のためカードキーで解錠を試す。赤いランプが点滅した。

「……え？」

もう一度かざす。

また赤い。俺はしばらくカードとドアを見比べた。

(これ、今出たら戻れないやつじゃないか……？)

幸いまだ室内にいる。フロントへ電話を入れると、すぐに確認します、と返事があった。数分後。こんこん、とドアが鳴る。

「フロントの瀬尾です。カードキーの確認に来ました」

名前を聞いて、俺は一瞬だけ考えた。

ドアを開けると、ロビーで見かけた若いスタッフが立っていた。

「あ……さっき、フロントにいた」

「覚えててくれたんですか？」

瀬尾は少し嬉しそうに笑った。

「隣で接客してたので」

「なるほど。俺も佐藤さんのこと見てましたよ」

「え？」

「いや、めちゃくちゃ疲れてそうな人いるなって」

「……そんな顔してました？」

「してました」

即答されて、俺は思わず苦笑した。

初対面なのに妙に話しやすい。瀬尾は持ってきた予備のカードをドアへかざした。今度は緑色のランプが点く。

「こっちは大丈夫ですね。佐藤さんのカード、磁気……じゃないな。登録のほうがおかしいかもしれないです」

「交換できます？」

「もちろん。新しいの作って持ってきます。ここ、開けたまま待ってるの嫌ですよね？」

「まあ……」

「じゃあ俺、一回戻ります。絶対そのまま外出ない
でくださいね」

「分かってます」

「なんか心配だな」

「子供じゃないですよ」

俺が返すと、瀬尾は声を立てて笑った。

「すみません。じゃ、すぐ戻ります」

それが、二人が初めてまともに交わした会話だった。

新しいカードを持った瀬尾が戻ってきたのは、それから五分もしないうちだった。何度か施錠と解錠を試し、問題がないことを確認する。

「これで大丈夫です。ご迷惑おかけしました」

「ありがとうございます」

「いえ。じゃあ、ごゆっくり」